

ぼくたちの夏祭り

【高学年 4 - (7)】

- 地域行事を生かして -

- (1) 主題名 郷土の文化や伝統を大切に〔 4 - (7)〕
 (2) ねらい 郷土を愛する心を持ち、文化や伝統を継承し発展させていこうとする心情を育てる。
 (3) 資料名 「ぼくたちの夏祭り」
 (4) 授業の展開例

	学習活動	主な発問と児童の心の動き	留意点
導入	1 夏祭りに参加した気持ちを話す。	今まで、どんな思いで地域行事に参加していましたか。 ・わくわくして待っていた。 ・友だちと行けるのがうれしい。 ・いろんな屋台が楽しみ	地域行事の思い出を振り返らせる。
展開	2 資料を読み、二人がどんな思いでいたのかを話し合う。	二人はどんな思いで練習に参加したでしょう。 ・けんた君はウキウキしている。 ・さとしは出ようかなと悩んでいたが、けんた君に誘われて出ようと思った。 練習ではどのような思いでいたでしょう。 ・やる気満々 ・楽しい気持ちで踊りを学んでいる。	二人の気持ちの高まりを押さえる。
	3 さとしの心情について考える。	帰り道、けんた君の言葉からさとしはどんなことを思ったでしょう。 ・僕らが大人になっても、夏祭りの伝統を受け継いでいってくれよというおじさんの願いがわかった。	主人公の立場に立って考えさせる。さとしが気付いたことをワークに書かせる。
	4 自分の生活を振り返る。	地域の行事の参加について、自分ならどうしていこうと思いますか。 ・友だちとともにこれからも参加してきたい。	おじさんの願いに気付いた主人公によりそって、自分と地域とのつながりを見つめさせる。
終末	5 教師(もしくはゲスト)の話を聞く	・君たちの代になっても、ふるさとのお祭りをずっと続けていってほしい。	地域の伝統行事を紹介し、受け継いでいく心構えを育てる。

ぼくたちの夏祭り

学校から一枚の紙が渡されました。夏祭りの練習の案内です。けんた君は、

「いやあ、もうすぐ夏祭りだな。」

と言いながら、ウキウキしています。けんた君がぼくに、

「おい、さとし。おまえ出ないのか。」

と誘ってくるのです。どうしようかと迷いましたが、

「今年の夏は、二度とないのだ。」

と叫ぶけんた君につられて、ぼくも参加することにしたのです。

六時に公民館に行ってみると、たくさんの人たちがワイワイ・ガヤガヤと話していました。おじいさんもおばあさんも、お母さんやお父さんみたいな人も、みんな楽しそうにしています。ぼくたちも、なにか心がおどってくるのです。

近所のおじさんがマイクを持って、いせいよくしゃべり始めました。

「静かに、静かに。本日は、ようこそお集まりくださいました。我が町内会の伝統である夏祭りの練習に参加してくださり、ありがとうございます。」

おじさんの話を聞きながら、

「いよいよ、はじまるな。おい」

けんた君が肩をぼくの肩にぶつけてきます。

ぼくも

「そうだな。」

とまんざらでもない気持ちを込めて返しました。

さあ、夏祭りの練習の始まりです。まずは手の動き、なかなかスムーズにいかなくても、けっこううまく踊っているけんた君。ぼくは、おばあちゃんにくわしく教えてもらいながらやっています。

「下から、すくい上げるようにね。」

と教えてもらいながら、何度もやっています。次は、足の動きです。手と足がうまく合わず変な踊りになっているけれど、それでも体がうれしがっているような感じがします。

おじさんが、

「ようし。今日はここまでにします。今日は小学生が十五人も参加してくれました。おじいさん・おばあさんも十五人です。このことがうれしいです。」

と言われました。

夏祭りの日になりました。月が美しく輝やき、さわやかな風が吹いています。にぎやかな音楽も流れてきました。校庭の真ん中にやぐらが組まれ、ちょうちんに灯がともりました。あかあかとしたやぐらの周りに大きな輪ができました。みんな浴衣を着て、うちわを持っています。ぼくとけんた君はうちわを腰にさして、大人の中に入りました。太鼓や歌に合わせて、やぐらの周りを何回もまわります。ぼくたちにとって心地よいあせが流れていました。

帰り道、けんた君がぼくの前に立って、

「夏祭りは終わったな。おれ、来年も出るぞ。大人になっても夏祭りに出るぞ。」
と言いました。ぼくはその言葉を聞いて、おじさんの顔を思い出しました。

活用に生かすための実践報告

「ぼくたちの夏祭り」

1 主題設定

地域の伝統行事が復活する兆しが見られる。特に地域ごとの祭りを行い、その祭りには子どもたちだけでなく、地域の人々も楽しみにされている。そこで、多くの地域で行っている祭りを題材にして、次代を担う子どもたちが、地域行事を継承し発展させていく主体者であることを自覚させ、そのために努めていこうする心構えを育てていきたい。

2 指導過程の工夫

地域行事を扱っていくため、事前に子どもの実態を把握する必要がある。そのために、アンケートや聞き取り等の調査を行った。実際に、夏祭りの踊りを公民館で学びに行った児童、祭りの日に参加した児童、祭りに参加しなかった児童がいて、それぞれの背景をも考慮して発問を考えていった。特に参加していない児童に対しての理由を把握することが必要である。

ふるさとの祭りの継承について考えていく場面において、諸般の事情から、祭りの形態が子どもたちの願い通りにいかない現状がある。そのことに対して様々な意見が出されるが、自分たちはどうしていききたいのかという肯定的な方向で話を進めていく。

3 発問の工夫

おじさんの思いに気付いた主人公という設定の発問をしていった。郷土の伝統を継承していくためには、児童が大人たちの思いに気づき、さらに自分が郷土を大切にしていきたいという思いにまで高めていかなければならない。さらに継承とは、参加するという次元から、祭りを作り上げる側の一員としての自覚を持つことであることに気付かせていきたい。

4 児童の反応（授業後の感想）

- ・日本の昔からの伝統の大切さ。毎年、大人だけでなく、子どもたちも練習に参加してくれることがうれしいんだと思う。
- ・おじさんが喜んでいたのは、こんなに小学生やじっちゃん・ばっちゃんが来てくれるなんて思っていなかったのに、たくさん参加してくれてうれしかった。
- ・喜んでくれる人もいるんだな。もっともって友だちを誘って、いい夏祭りにしよう。僕たちもこう思うようになるのかな。
- ・こういう風に来年になっても大人になってもやりたいという人がいるからおじさんは喜んだんだろうな。
- ・人がたくさん出てくれると他の人たちもうれしくなって、もっとやる気になってくる。
- ・大人になっても、皆で一緒に一つのことをするのは楽しいし良いことだ。大人と子どもの交流にもなるんだから。
- ・さとし君は、おじちゃん、けんた君みたいな人に受け継いでほしいと思っていると感じている。
- ・おばあちゃんもおじいちゃんも子どもこのころこの踊りをして、今も伝統が続いている。子どもたちがおじいちゃんおばあちゃんになっても、子どもたちに伝統を教えてほしい。
- ・おじさんは一生懸命祭りを成功させようとしたんだ。この思いが伝わった。こうやって伝統になるんだ。

5 実践者からの一言

内容は把握しやすいが、地域実態や児童と地域の繋がりによって、児童の地域に対する考えが異なる。地域にあまり参加していない児童にとっても、意欲付けができるように声かけをしていく。

（旭小学校 山口幸造）